

目的 前報では、第7頸椎から肩先点までの幅ならびに肩傾斜角度の違いが和服の袖付位置とどのような関係にあるかを、動作適合性および美的効果の二面から検討した。その結果それらによる着くずれの差は認められず、また美的評価も肩先点から袖付位置までの寸法によってなされることを明らかにすることができた。今回は、素材の特性と和服の袖付位置の関係について前報同様動作適合性および美的効果上から検討した。

方法 1)被検者は女子短大生86名の身体計測結果をもとに、その平均値に近似な体型の学生1名(20歳)とした。2)試料は曲げ剛さの異なる次の4種を選んだ。A<sub>1</sub>:ウールポプリン、A<sub>2</sub>:混紡ブロード、A<sub>3</sub>:ポリエステル富士絹調、A<sub>4</sub>:シルック 3)実験着は二部式とした。肩幅は前報の結果をもとに肩先点から6cm下がる寸法を最小とし1.5cmピッチで変化させ、各試料につき6種(B<sub>1</sub>~B<sub>6</sub>)を作成した。4)着つけ、動作の種類、着くずれ量の測定および美的評価の方法は前報と同様である。なお美的評価のためのパネルは学生10名とした。

結果 1)動作による着くずれは脇に多く認められ、摩擦係数の小さい試料ほど着くずれ量は大きくなった。2)美的評価はA<sub>1</sub>とA<sub>2</sub>とでは顕著な差がみられず、肩先点からの下がり寸法の小さい実験着の評価がやや高い傾向にあった。また曲げ剛さ、ドレープ係数の小さいA<sub>4</sub>は評価に正当性がみられなかった。さらに肩先点からの下がり寸法が最大のB<sub>6</sub>(13.5cm)はいずれの試料においても低評価であった。以上のことから袖付位置に対する美的評価には素材の特性、特に曲げ剛さ、ドレープ係数が関与することがわかった。